

JODCニュース



目 次

昭和60年 8 月 No. 31

海の相談室開設1周年を迎えて.....	2
刊行物紹介.....	4
沿岸海洋データカタログ(大阪湾).....	5
「臨時海の相談室」の開設.....	6
「ラペルーズ海峡」.....	7
調査研究レポート.....	8
会議レポート.....	10
IOCからの受領刊行物、文書等.....	13

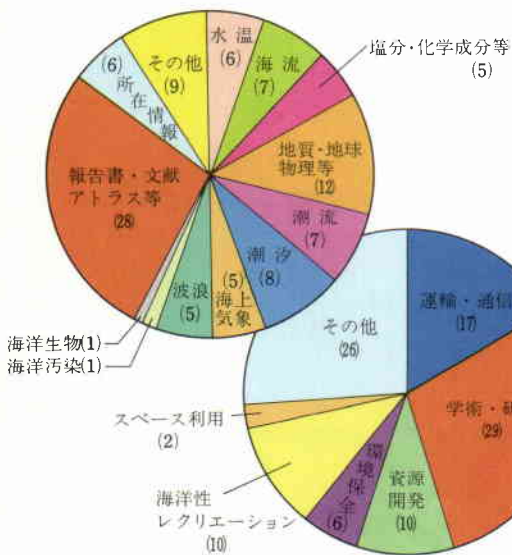


海の相談室開設一周年を迎えて

日本海洋データセンター(JODC)は、昭和40年に我が国唯一の総合的海洋データバンクとして海上保安庁に設置されました。その後、58年の機構改革で水路図誌刊行部門と合併、行政単

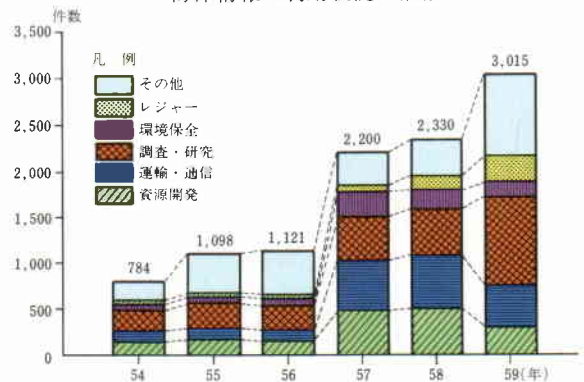
位としては海洋情報課となり、水路業務の成果の管理・提供を併せて担当することとなりました。これにより、従来から関係機関の協力を得て管理している水温・潮流などの自然科学データに水路部100年の成果が追加され、港湾・漁礁・海中公園などの社会情報、海図・水路誌などの水路部刊行物や内外関係機関の各種文献等扱うデータの種類・量とも大幅に拡大しました。

種類別提供比率(%)



利用目的別提供比率(%)

海洋情報の利用状況の推移



また、海域的にも従来の沖合から沿岸へとデータの重心が移り、沿岸域海洋空間の開発利用や、海洋レクリエーション等にも対応できることになり、総合的な海洋データステーションとなりました。

JODCには、以前から学者、研究者の方々によく利用されていましたが、

**“誰でも欲しいデータが
手に入るシステム!!”**

をめざして、新しいJODCのデータ提供部門として、「海の相談室」を1年遅れの昭和59年4月1日に開設しました。「海の相談室」では、個々の利用者との対話を通して、各種の資料の中から真に欲しいものを、より利用し易い形で提供するという方式をとっています。

JODCからのデータの提供は、従来、交換を原則としてきました。各機関が保有するデータを預託し、他に必要なものを引き出してもらい、データの銀行です。

しかし、海洋データは、データの生産者だけでなく知的生産者にも、また、特に沿岸域ではデータの所有者であっても利害関係のために現在交換できないという人にも、利用されなければなりません。そうしなければ、我が国の海洋科学も、海洋の利用・開発も進ま

海の相談室メンバー



海の相談室は日本海洋データセンターの情報提供窓口です。個々のデータの利用についての相談、資料類の閲覧、情報源の紹介のほか、海に関する様々な疑問・質問への回答など、多様なサービスを行っています。

なくなってしまう。……ということで、いまではすべての人に開放されています。より開かれたJODCを目指しておりますので御利用下さい。また、御意見をお寄せ下さい。JODCがよりよく機能するために、この運営に積極的に参加して下さいようお願いいたします。

海の相談室

電話：(03) 541-3811(内線 738)

利用時間：(月～金) 09:05～17:20

：(土) 09:05～13:05

交通 地下鉄：日比谷線 東銀座下車
徒歩8分

機関 国鉄：新橋下車 徒歩15分



刊 行 物 紹 介

海洋情報便覧

海洋に関心のある1人でも多くの方々に、少しでも海洋情報・データへのアプローチを容易にしてもらうため、センターを利用する際のハンドブックとなるものです。

1. 海洋データの所在

日本海洋データの資料を基にして、水温、海流、波浪、潮流、潮汐、水深、地質、海洋汚染等の各種のデータを磁気テープ、文献など、形態別に概要をまとめてある。

2. データセンターの利用方法

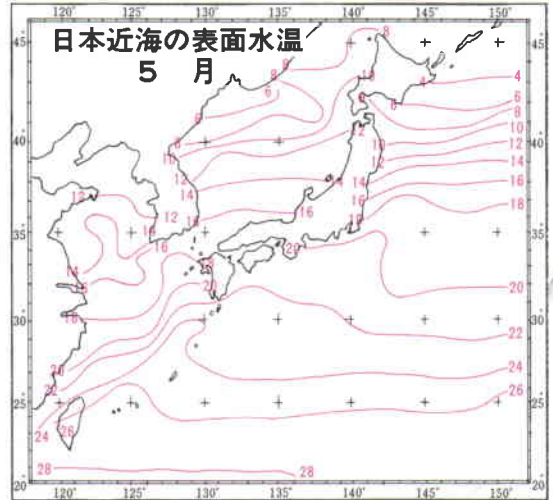
閲覧手続、複写、相談業務など

3. データセンターの出版物一覧

マニュアルガイドシリーズ、
カタログシリーズ、
プロジェクト関連刊行物、
特殊刊行物シリーズ
市販された刊行物、その他の刊行物

4. データセンターの活動

設立と任務、業務概要、経緯



5. 海洋情報ニーズの動向

分野別・利用目的別提供比率

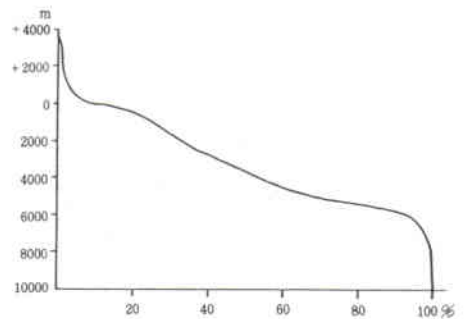
6. 水路図誌、港湾等の一覧

海図、特殊図、海の基本図、水路書誌
潮汐、潮流、波浪、汚染等の分布
などを掲載しています。

200海里（深度別面積一覧）

属性	面積 km ²	%
陸	374,900	7.7
0 ~ 1000 m	837,800	17.3
1000 ~ 2000	427,000	8.8
2000 ~ 3000	453,900	9.4
3000 ~ 4000	481,600	9.9
4000 ~ 5000	806,500	16.6
5000 ~ 6000	1,188,400	24.5
6000 ~ 7000	194,800	4.0
7000 ~ 8000	53,500	1.1
8000 ~ 9000	22,200	0.5
9000 ~ 10000	7,700	0.2
計	4,848,300	100.0
200海里海底面積	4,473,400	

我が国及び我が国から200海里(約370km)以内(相対国との間の距離が400海里以内の場合は中間点まで)の水域の深度別面積。



本書は東京湾、伊勢湾、と刊行されたデータカタログの第3段として、大阪湾に関する各種データを取りまとめたもの。

1. 関連図類

目録

2. 水深データ

多目的利用のために水深や海岸線を数値化しMTに収録したものの、水深分布、メッシュ統計、鳥瞰図等の作図例

3. 地質データ

底質データ分布、試錘地点図、体積層基底図、体積層等厚図

4. 水質データ

測点分布図、水温統計、水温分布図、塩分分布図

5. 潮汐データ

潮汐調和定数既存点及び大潮升分布、潮汐調和定数カタログ、験潮所一覧

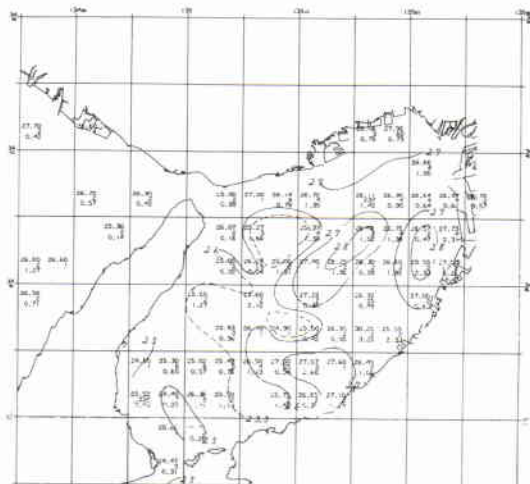
6. 潮流データ

潮流測点分布、潮流データカタログ、潮流調和定数リスト

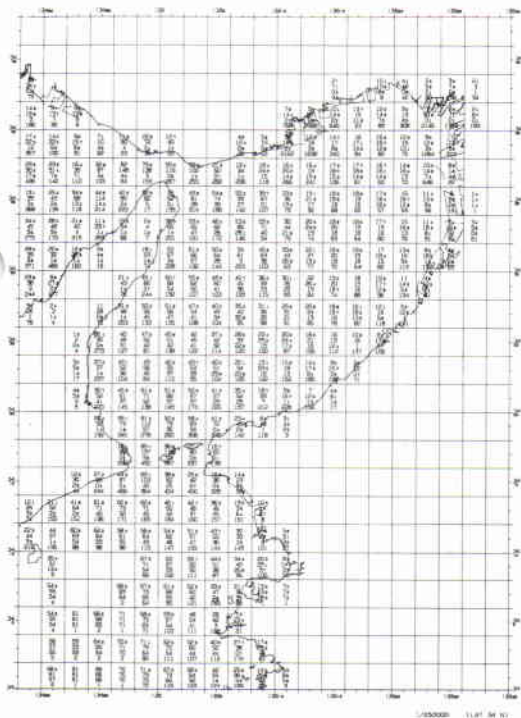
7. 波浪データ

海図、沿岸の海の基本図、測量原図等の測器による波浪観測点一覧、目視波浪計、風統計

平均水温分布(表層)―8月



メッシュ統計水深図(2メッシュ内の平均、最大、最小)



海洋調査報告一覧 1980年

” 1981年

IOCで定めたROSCOPフォーマットに記載した国内各機関の航海目録で、船名、機関名、航跡図などが記載してある。

GF-3マニュアル

IOCで推進している国際海洋データ交換の磁気テープ用汎用フォーマット(GF-3)についてのテキスト

日本海洋データセンター

所蔵文献目録(国内編)

昭和57年刊行の改訂版で、国内の海洋関係機関から送付された文献を機関別に分類した。

開設!! 臨時「海の相談室」

去る7月20日～30日までの「海の旬間」の期間中に、東京湾のお台場近くにある日本海事科学財団「船の科学館」で開催された、「海のアトラス展」会場に「海の相談室」が開設された。

初めての試みなのでどうなることかと心配でしたが、どうやら無事盛況のうちに終了することができました。

夏休みという時節柄、親子連れや小中学校の低学年生が圧倒的に多く、パソコンを使って描く、日本各地の潮汐予報に人気があり、通常の相談室で受けるような質問はほとんどなかったのですが、用意したパンフレット類も大量に捌けたので、相談室業務のPRには十二分な効果があったことと思います。



これからもこういう触れ合いの機会を多く設け、ひとりでも多くの人々に海への関心を持ってもらえるよう、関係者一同心より念じています。



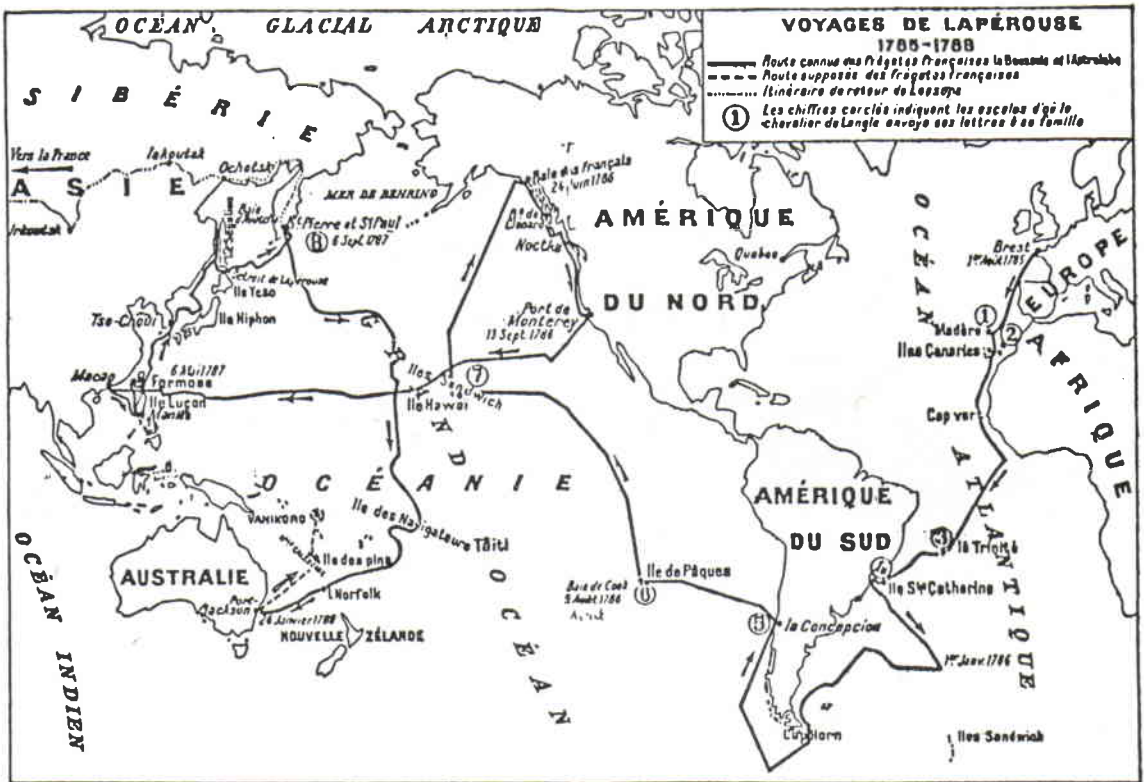
《小中学生に多くの人気を集めた》

「ラペルーズ海峡」……………??

日本の北方探検家間宮林蔵よりも20年余りも早く、この海峡に足跡を記した異邦人がいました。その人とはキャプテンクックとほぼ同じ時代に太平洋を航海し、日本の北方海域を調査したフランスの大航海家“ラペルーズ”(1741-1788, Jeav-Francois de Lape'rouse) その人です。彼は、東シナ海から対馬海峡を抜けて日本海を北上して間宮海峡が海峡であることをつきとめ、当時シベリア大陸の一部かそれとも島かと地理学上の争点となっていたサハリン(樺太)が島であることを確認しました。その帰途、当時ヨーロッパでも知られていた津軽海峡を抜けて太平洋に出るところを、偶然サハリン(樺太)と北海道の間に横たわる海峡を発見し、ヨーロッパ人として最初に通過したのです。

このため、宗谷海峡が国際的には“ラペルーズ海峡”と呼ばれ、日本の地図帳にも“宗谷海峡(ラペルーズ海峡)”として載っています。(永年なれ親しんだ地図帳ですが、そう言われてじっくり見ればナルホド。)

この話、当相談室にたまたま日本海の舳倉島の経緯度を尋ねられたラペルーズ研究家の質問が発端でした。ご質問にたいしても赤面のいたり、本初子午線は最初からグリニッチとばかり思っていた浅学非才の徒は、こちらの答えた経度か2度20分14秒違うことに、逆にこちらが質問する次第。ラペルーズは舳倉島の経緯度を測るにあたり、本国パリ天文台を経度の基準、0度としていたのです。



〈ラペルーズの航海ルート〉 (図は地図学会編「地図」 Vol. 19による)

調査研究レポート

沿岸域情報整備調査

1. 調査の概要

沿岸域の利用・開発を円滑に促進するためには沿岸域の多様性、公共性、将来性、厳しい自然環境について総合的に検討する必要がある、このためには沿岸域の持つ自然的、社会的特質を十分に把握しておく必要があります。

このため、海上保安庁水路部では国土計画基礎調査費により沿岸域情報整備調査を実施しており、国土利用計画策定のために必要となる基礎的資料を数値情報としてとりまとめています。

本調査は59年度から6か年計画で進められており、59～60年度は瀬戸内海を中心に、61～62年度は東京湾、伊勢湾、大阪湾について、63～64年度はその他の区域を対象に調査を行うことにしています。

59年度は図1に示す区域で自然情報及び社会的情報を収集し、数値ファイルを作成しました。

2. 調査成果の概要

本調査では沿岸域の基礎的情報を自然情報及び社会情報に大別し、表1に示す項目について数値ファイルを作成しました。

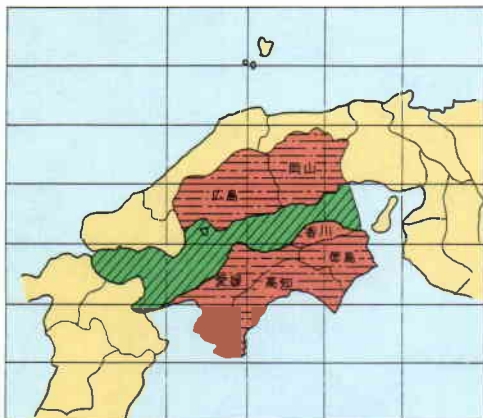


図1 昭和59年度の調査対象区域

表1. 整備項目一覧

大項目	中項目	小項目
自然情報		水深、底質、潮汐、波浪、潮流、渦流、急流発生箇所、藻場
	漁業レジャー	漁港、増養殖施設、漁礁、マリーナ、磯釣り場、史跡、名勝、天然記念物
社会情報	通信運輸調査研究保護海域	港湾、海底施設線等 海象観測施設 公園区域、環境基準型あてはめ水域、水産動物保護水面
	行為海域	漁港区域、港湾区域、港域、砂利採取区域、航路
	権利海域	漁業権設定区域、鉦区

整備された情報の属性及び数値ファイルを使用するために必要な事項は「沿岸域整備調査作業報告書」（海上保安庁水路部 昭和60年3月）にとりまとめられています。

60年度は自然情報については四国南岸、山陰沿岸、九州北東沿岸を対象に、社会情報については山口、島根、鳥取、福岡、大分各県を対象に調査を実施する計画です。

多元的情報の加工処理技法に関する調査研究

—海洋情報総合利用システムをモデルとして—

近年、海洋資源の利用、海洋エネルギーの開発、海洋性レクリエーションの進展に伴い、関係各省庁、地方公共団体等からの海洋情報の需要が増大しています。しかし、現在収集されている情報は、①自然情報、社会情報などの複雑な要素から構成されており、多元的な性格を持っていること、②各関係機関が収集した海洋情報は測定されたデータごとに調査方法、調査密度、精度等が一定しないこと、③海洋情報の有

効利用を図るための加工処理技法の開発が行われていない、等により必ずしも十分に活用されているとはいえない状況にあります。

このため、日本海洋データセンターでは、収集されたデータの体系的整備を図り、その活用を促進する観点から、行政情報処理調査研究費により、「多元的情報の加工処理技法に関する調査研究」(昭和60～61年度)を実施し、海洋情報の利用ニーズに対応した加工処理技法の開発等の検討を行うとともに、国と地方公共団体の間における海洋情報の収集・管理・提供に関する役割分担、連携方策等について検討し、これらを有効・適切に機能させるための海洋情報総合利用システムの基本設計を行うこととしています。

60年度は関係各省庁、地方公共団体に対してアンケート及びヒアリングを実施し、海洋情報の利用ニーズを把握するとともに、データ空白域の解消手法及び多元的情報の融合化に関する分析検討等を行い、海洋情報総合利用システムの基本構想を策定する予定です。

海洋調査データの相互利用のための 互換性の向上に関する研究

1. 研究の概要

200海里経済水域の設定をはじめとする新海洋秩序の時代を迎え、我が国の社会、経済の発展を支えるために不可欠な海洋、特に200海里水域内の有効利用を図ることは以前にも増して重要となってきています。

このような背景のもとに、昭和58年度から5か年計画で、科学技術振興調整費「我が国周辺200海里水域における新調査システムの開発に関する研究」が開始されました。日本海洋データセンターではこの研究の一環として「海洋調査ヘデータの相互利用のための互換性の向上に関する研究」(58～60年度、3か年計画)を実施しています。各種の海洋調査で取得される海洋データはその利用目的によって計測機器、観測方法、処理、保存の形態が異なり、特に計測機器の記録媒体はそれぞれの機器によって様々であり、今後とも種々の媒体が開発される方向にあります。海洋データ、特に生データベースでの相互利用を考える場合、このことが大きな障害要因となっています。

このため本研究では海洋データの互換性の向上方策について検討を行うものです。

2. 59年度の研究成果の概要

58年度に実施した各種海洋調査機器の現状調査結果を踏まえて、59年度には海象系測器を対象にデータ記録に関する詳細調査を実施し、データの使用状況、用途別に必要とされるデータ精度を明らかにするとともに、データの互換性の障害となっている要因を検討しました。

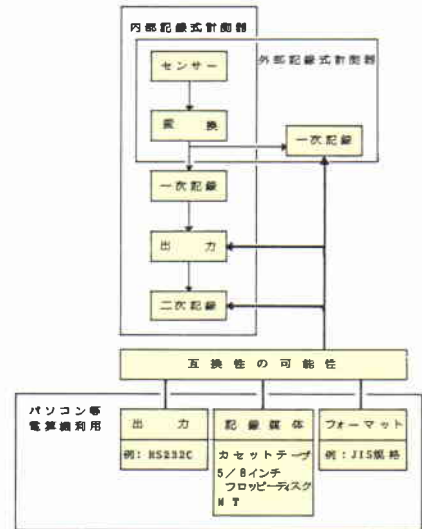


図2 電子記録式計測器の互換性

研究成果は「海洋調査データの相互利用のための互換性の向上に関する研究(その2)」(海上保安庁水路部 昭和60年3月)にまとめられています。電子記録式計測器の互換性については図2に示すフローで互換性の可能性が指摘されています。

会議レポート

第16回黒潮調査研究検討会

日時 昭和60年1月29日(火)午後2時～5時

場所 科学技術庁第2会議室

議事概要

1. 「黒潮の開発利用の調査研究」(KER)の60年度予算案について科学技術庁から説明があった。
2. ポストKER 計画の一環として実施する予定の日中共同黒潮調査計画の日本側計画案及び中国側計画案について検討が行われた。

第17回黒潮調査研究検討会

日時 昭和60年3月28日(木)午後10時～12時

場所 科学技術庁第2会議室

議事概要

日中共同黒潮調査計画に関する打合せのために訪中した科学技術庁担当官から打合せ結果の報告があり、中国側要望事項に対して検討が行われた。

第18回黒潮調査研究検討会

日時 昭和60年6月17日(月)午後10時～12時

場所 科学技術庁祝田橋分室第6会議室

議事概要

1. 59年度調査実施状況及び60年度調査実施計画について各調査機関から説明があった。
2. 7月上旬に開催される日中共同黒潮調査に関する中国との打合せ会議に向けて日本側計画案について検討が行われた。

第19回黒潮調査研究検討会

日時 昭和60年7月19日(金)10時～12時

場所 科学技術庁祝田橋分室第6会議室

議事概要

日中共同黒潮調査に関する中国国家海洋局との打合せ結果について科学技術庁から報告があった。

日中共同黒潮調査に関する

中国国家海洋局代表団との打合せ会議

会期 昭和60年7月2日(火)～6日(土)

場所 科学技術庁宇宙開発委員会会議室及び
科学技術庁祝田橋分室会議室

出席者

日本側 科学技術庁海洋開発課長他5名

中国側 国家海洋局学術委員会蘇紀兰副主任
他5名

議事概要

日中共同黒潮調査に関する両国計画案について協議が行われ、共同調査は昭和61年度から7か年計画で実施し、東シナ海及び日本南方の黒潮海域を調査海域とすること等が両国で合意された。



第14回 IGOSS 国内連絡会

日時 昭和60年3月18日(月)10時～12時

場所 気象庁海洋気象部会議室

議事概要

1. ユネスコ本部で開催された第3回IOC/WMO合同 IGOSS 作業委員会の議決および勧告の概要紹介。
2. 昭和59年7月1日開始のBATHY/TESAC通報式について、気象庁から国内関係機関への周知のため、59年5月末をめぐりに「BATHYの手引き」の改訂版と新形式の「BATHYメッセージ・ログ」用紙の配布が行われる予定。
3. BATHY/TESAC報の通報量について、海上保安庁からは地理的分布と国内の機関別通報

数、気象庁からはGTS入力地点別の通報数と月別通報数の推移の報告が、それぞれ行われた。

4. IGOSSデータ処理サービス・システム特別海洋中枢について、気象庁から概要紹介。気象庁ではIOC及びWMOに対して海洋気象部海洋課に、「太平洋域のための特別海洋中枢(SOC)」設立の手続を行う予定。なお、手続の経緯をユネスコ国内委員会自然科学小委員会IOC分科会に報告する。
5. IODE-IGOSS専門家会議について、IOC事務局より海上保安庁に本年秋の開催要請があった。また、気象庁海洋気象部海洋課に電話FAXが設置された。

第43回 三官庁海洋業務連絡会

日時 昭和60年3月20日(水)14時～17時

場所 海上保安庁水路部6階会議室

議事概要

1. 昭和60年度各機関海洋調査計画について水産庁、気象庁、防衛庁、海上保安庁の順にその計画について説明がなされ、相互に質疑応答があった。

海洋測器専門委員会の報告が、当番官庁であった東海区水産研究所より報告がなされた。

CTDのキャリブレーションの方法について60年度に検討するよう連絡委員会から専門委員会へ依頼された。次回(60年度)も委員会の当番には東海区水産研究所があたることとなった。

気象庁からは同庁のIGOSSの活動報告があった。

日本海洋データセンターから、59年度の業務報告があり、ROSCOP報告状況について質疑が行われた。

2. その他

気象庁から、長風丸代船建造にあたり搭載機器の情報交換の要請。

水産庁及び海上保安庁の組織名変更に伴い、「水産庁研究部長」及び「水産庁研究部研究課長」に、海上保安庁は「水路部企画課長」、「海洋調査課長」、「海洋情報課長」、「海洋調査課補佐官」に名称変更が行われた。



海洋資料交換国内連絡会第13回会議

日時 昭和60年2月18日(月)14時～17時

場所 海上保安庁水路部第2会議室

議事概要

1. IOC国際海洋データ交換作業委員会会議で採択された決議 IODE-XI 1-XI 8.、及び勧告 IODE-XI 1-XI 4. と IODE の現状の紹介。

2. モスクワで開催された責任国立海洋データセンター (RNODC) 専門家グループ第5回会議の報告

3. JODC の活動状況、データファイル状況等の紹介。

海洋資料交換国内連絡会第14回会議

日時 昭和60年8月5日(月)14時～15時

場所 海上保安庁水路部2階会議室

議事概要

1. 長期海洋観測ステーションデータの IOC C.L 第1031号のアンケートに対する回答について、年数回の定点観測や人工衛生による表面水温観測も対象になるか否か IOC に問合わせ、その結果をみて、対応策等を別途、連絡、協議する。

2. 第4回 WESTPAC 会議案について、「海洋資料の交換」を提案した。なお、開催までに新規提案があれば事務局が調整します。

3. MARPOLMON の RNODC (IOC C.L 第1012号) について、国内関係機関の了承が得られるなら、WESTPAC における RNODC の経験や MAPMOPP 実施時のデータ収集等の経験を生かして、JODC が MARPOLMON の RNODC になるため、IOC にその意志を表明したい旨説明があり、各関係機関から意見が出された結果、

- ・ MARPOLMON そのものは GIPME の計画のため、国内的に調整された同計画に従い、データの収集、加工、保存及び提供のみを行う。
- ・ 行政的配慮の結果、データ提供協力が限定される場合がある。

を条件に、JODC が MARPOLMON の RNODC として立候補することが了承された。

なお、質問に応じて説明された立候補のために IOC に送付される趣意書への記載事項は次のとおり。

- ① 対象とする海域は WESTPAC と同じ海域とする。

- ② 油による海洋汚染データの収集等に対する経緯や過去の実績

- ③ データの紹介は WESTPAC の RNODC として遂行してきた経験を生かして実施する。

- ④ フォーマットの定まっていないデータを受け入れること及びそれらをコード化する。

- ⑤ データ処理結果等を予算の許す範囲内で WDC 関係国等に無料で配布する。

- ⑥ 研修については実施する自信がある。

- ⑦ 現在は主体が油であるが、調査項目が追加された場合は、追従する意志がある。

4. JODC の活動状況および今後の予定が報告された。



IOCからの受領刊行物、文書等

IOC刊行物・文書保管センターとして、昭和60年1月1日から7月31日までに受領したIOC関係の刊行物、文書は下記のとおりである。

1. IOC回章

回章番号（日付）

1 0 0 4 (84-12- 3)	海洋科学技術情報源 (MASTIR) ハンドブック作成のための協力要請、研究所の設立目的、機能等に関するクエスチョネーア
1 0 0 5 (84-12-13)	漂流ブイ利用共同体設立のためのWMO/IOC合同準備会議開催通知 (1985年4月15—19日、ジュネーブ)
1 0 0 8 (85- 1-21)	アルゴス利用料金に関する第4回会議要約の送付通知及び共同体設立会議への準備要請
1 0 1 2 (85- 1-25)	RNODC-MARPOLMON設立に対応する応募要請
1 0 1 4 (85- 2- 1)	WESTPAC加盟国による海洋データ提供を促進することへの要請
1 0 2 2 (85- 5-24)	DNP及びNOPの提出とその調査データ提供状況
1 0 2 5 (85- 5-24)	JODCにおいて9月に開催される海洋データ管理研修に対する研修生の募集要項
1 0 2 9 (85- 6-21)	第一回中央東部大西洋IOCプログラム会議の開催通知 (1986年1月20~25日、ギニアのコナクリ)
1 0 3 1 (85- 7- 1)	長期海洋時系列データマニュアル作成のための長期海洋観測点リスト作成要請

2. 会議要約書

IOC-WMO-CPPS/ EI Nino-VI	1984年5月31日～6月2日、リマで開催されたエルニーニョ調査WGの第4回会議
IOC-SCOR/OCCO-IV	1984年11月27日～12月4日、ワシントンで開催された機構変動と海洋に関する第4回委員会
IOC/TT-LLOSI-III	1984年12月17日～21日パリで開催された海洋法と新海洋体制についてのIOCの方向付けを行うタスクチームの第3回会議
IOC-UN (OETB)/ GGE-OSNLR-I	1985年1月14日～18日パリで開催された非生物資源に関する海洋調査計画第1回専門家会議
IOC WORKSHOP REPORT 36	1984年5月28日～6月2日、リスボンで開催された調査船の有効利用に関するIOC/FAO合同ワークショップ
IOC-IHO/GEBCO-X	1985年4月23日～25日、モナコのIHBで開催された大洋水深総図のためのIOCとIHOの第10回合同指導委員会
SC-IOCARIBE-I	1984年8月20日～25日、オランダで開催されたカリブ海付近海域小委員会第1回会議
IOC/WC-GIPME-V	1984年7月30日～8月3日、バンコックで開催されたGIPMEの第5回作業委員会
IOC/TEMA-IV	1984年6月4日～9日、リスボンで開催されたTEMA第4回作業委員会
IOC WORKSHOP REPORT 32 -Supplement-	1982年9月27日～10月1日、パリで開催された海洋科学発展のための国際協力及び新海洋体制下における技術移転に関するUNU/IOC合同ワークショップに提出された報文集

IOC-FAO/ GGE-OSLR-I	1984年7月16日～20日、パリで開催された生物資源に関する海洋調査計画第1回専門家会議
CCOP (SOPAC)-IOC/ STAR-I	1984年11月2日、西サモアで開催された南太平洋の地質構造と資源に関するCCOPとIOCの合同WG第1回会議
CCOP-IOC/SEATAR-X	1984年11月29日、インドネシア、バンドンで開催された東アジア地質構造と資源についてのIODE以後の研究に関するCCOPとIOCの合同WG第10回会議

3. 刊行物

MARINE AND COASTAL PROCESSES IN THE PACIFIC: ECOLOGICAL ASPECTS OF COASTAL ZONE MANAGEMENT

1980年7月14日～17日パプアニューギニアで開催されたユネスコのゼミナールにおいて発表された報告文集

COASTAL ZONE RESOURCE DEVELOPMENT AND CONSERVATION IN SOUTHEAST ASIA

ホノルルにあるユネスコのEAST WEST CENTREの出版物で、インドネシア沿岸域の調査研究の成果

THE MANGROVE ECOSYSTEM: RESEARCH METHODS

ユネスコ、SCORのWGによるマングローブの生態に関する報告書

CORAL REEF MANAGEMENT HANDBOOK

ユネスコのサンゴ礁管理に関するワークショップの決議に基づいて作られたハンドブックであり、サンゴ礁の保存を目的とする

OCEAN OBSERVING SYSTEM DEVELOPMENT PROGRAMME

IOCの技術書シリーズで、WMO、ICSU、SCOR、IOC共同のWCRPのための行動計画である

MANUAL ON SEA LEVEL MEASUREMENT AND INTERPRETATION

マニュアル・ガイド集の14番目のもので、海面変動の世界的な観測を実施するための統一的な方法を示している。

4. IOC情報集

情報番号 (日付)	内 容
INF-626 (85-1-25)	ブラジル海洋調査計画 : 1985年~1986年計画分 (DNP39航海)
INF-627 (85-2-21)	カナダ海洋調査計画 : 1984年実施分 (DNP26航海)
INF-630 (85-3-7)	トルコ海洋調査計画 : 1985年計画分 : (NOP58航海)
INF-632 (85-4-2)	インド海洋調査計画 : 1985年計画分 : (NOP 9航海)
INF-634 (85-4-30)	スウェーデン海洋調査計画 : 1985年計画分 (DNP13航海、NOP 3航海)
INF-636 (85-5-2)	デンマーク海洋調査計画 : 1982年実施分 (DNP16航海)
INF-637 (85-5-2)	デンマーク海洋調査計画 : 1983年実施分 (DNP17航海)
INF-638 (85-5-2)	デンマーク海洋調査計画 : 1984年実施分 (DNP13航海)
INF-639 (85-5-2)	デンマーク海洋調査計画 : 1985年計画分 (DNP11航海)
INF-642 (85-6-10)	韓国海洋調査計画 : 1985年計画分
INF-647 (85-8-1)	日本海洋調査計画 : 1985年計画分 (DNP102航海)

西表島のコウモリ

ブラリ1人旅。ヤモリが壁を這い回る安民宿にころがりこんだ。昼は海で熱帯魚を眺め山を歩き、たまには木陰で昼寝もする。夜は泡盛をたらふく食らうのが日課となったある晩、土地っ子からコウモリがいる鍾乳洞の話きいた。私は、無性にコウモリの写真が撮りたくなり、単身で乗り込むことにした。

翌朝「ハブがよく出てねえ・・・」というだっ広い草地を、どのくらい歩いたのだろうか。草が生い茂り、気をつけて歩かなければ見過ごすような場所に、洞はポッカーと口をあけていた。入口は約2m程、斜めに地底へと続いている。意を決して潜り込む。洞内は「外界の猛烈な熱さが嘘のように・・・」という甘い期待は無残に打ち砕かれ、熱さと猛烈な湿度が襲う。すぐに多量の汗が吹き出し、服は海に落ちたようにグチャグチャになる。地下水の流れに足を取られつつ奥へ進む。しばらくは直径2~3m程度の広さがあり、特に大きな鍾乳石はないが、あちらこちらにぶら下がっているのがわかる。200mくらい歩いたのだろうか。突然、洞が狭くなる。這って進むもうとしたが、リックが引掛かり通れない。しかたなくリュックをおろし、前に押しやりながら進む。なんとも言い難い不安が襲ってくる。やっと通り抜けると、また広くなったが、今度は人の背丈程の高さしかない。懐中電燈で天井を照らすと、いたいた！握り拳程の大きさのコウモリが、恐る恐る照らす光に



中に、そこかしこに浮び上がる。ざっと70~80匹位であろうか。光に特に驚く様子もなく、じっとブラ下がっている。しばらく彼らと鍾乳石に見とれていたが、やがてストロボのスイッチをいれると、どうだろう！チャージ音を聞いたとたんに、彼らは異様な声を発して洞の中を暴れて飛び回るではないか。入口へ逃げて行くのもいる。とても写真を撮れないので、しかたなくスイッチを切る。しばらくすると、ブラさがる。再びスイッチを入れると、暴れ回る。そんな事を繰り返しているうちにコウモリの数も減っていき、私も熱さと全身ズブぬれの不快感と倦怠感で、撮影を諦めた。洞は更に20~30m程度で行き止まりになっていた。

まぶゆいばかりの光と限りなく青い空、夏草の香が快い。時間にして1時間半程度の、しかし、長く感じた地底旅行であった。(M生)

編集後記

日本海洋データセンターは今年で設立20周年、関係各方面の暖かいご支援により成人式を迎えることができました。おりしも日本の海洋開発も本格化の時代を迎え、海洋情報の重要性が広く認識さ

れるようになりました。大人の仲間入りを機会にJODCニュースも本号から大きく模様替えをしました。今後とも皆様に御愛読いただけるよう内容の充実に努めていきたいと考えています。

表紙の写真：西表島

編集発行 日本海洋データセンター (JODC)

〒104 東京都中央区築地5-3-1 海上保安庁水路部 TEL(03)541-3811